

■ PCN だより**PCN Volume 62, Number 6 の紹介 (その 1)**

2008 年 12 月発行の PCN Vol. 62, No 6 には Review Article が 2 本, Regular Article が 12 本, Short Communication が 3 本, Letter to the Editor が 8 本掲載されている。今回は, 外国から投稿された Review article 2 本, Regular article 7 本の内容を紹介する。

Review article

1. New perspectives on techniques for the clinical psychiatrist: Brain stimulation, chronobiology and psychiatric brain imaging
Raffaella Zanardi, Barbara Barbini, David Ros-sini, Alessandro Bernasconi, Felipe Fregni, Frank Padberg, et al.

精神科臨床における新しい治療法の展望: 脳刺激法, 時間生物学, 精神科脳画像について

本総説では, 気分障害に対する新しい非薬物療法の可能性についての討論がまとめられている。近年うつ病に対する有効性が言われ始めている各種の身体的療法についての評価をレビューした論文である。最初に, うつ病に対する経頭蓋磁気刺激法 (TMS) の有効性についての最新の知見が紹介され, 続いて気分障害に対する時間生物学に基づく治療的介入の有用性が論じられている。そして, 最後に気分障害の介入にどのような脳機能画像法の利用が考えられるかについて論じられている。これからの精神科臨床は, このような新しい治療法・介入法を導入していく努力が必要とされている。

2. Postural induced-tremor in psychiatry
Beatriz Arbaizar, Inés Gómez-Acebo, and Javier Llorca

精神科臨床における姿勢振せんについて

姿勢振せんは精神科におけるもっともよく見られる運動障害であるが, 臨床家にとってはしばしば最も困難な問題でもある。振せんは, 生理的, 本態性, 薬剤性, パーキンソン病による姿勢振せんとに分類される。精神科臨床で使用される薬剤で姿勢振せんを引き起こしうるものには, リチウム, バルプロ酸, ラモトリジン, 抗うつ薬, 抗精神病薬がある。これらの薬剤により惹起される姿勢振せんの臨床的特徴について述べられている。このような薬剤性振せんに対する薬物療法としては, β ブロッカー, プリミドン, ガバペンチン, トピラメート, ベンゾジアゼピンなどがあるが, これらの使用法, 副作用などについてまとめられている。

Regular Article

1. Verbal memory and verbal fluency in adolescents with schizophrenia spectrum disorders
N. I. Landro and T. Ueland

思春期の統合失調症スペクトラム障害における言語記憶と言語流暢性について

【目的】成人統合失調症患者における言語記憶と言語流暢性の障害は広く認められているが, 思春期の統合失調症スペクトラム障害の患者における研究は少ない。本研究では, 思春期の統合失調症スペクトラム患者についての言語機能について

検討した。【方法】平均年齢 15.4 歳の統合失調症スペクトラム患者 21 名について、言語の学習・記憶・流暢性について対象群 28 名と比較検討した。【結果】患者群は、学習、遅延再生、頻度予測課題で低い得点であったが、再認、保持、および、非顕在記憶、干渉による影響については差異を認めなかった。患者群では遅延再生で低得点であったが、記憶した内容はよく記憶していた。患者群では音韻および意味での流暢性は障害されていたが、言語流暢性に関するクラスタリングにおいてのスイッチングについても対象群と比較して差異を認めなかった。患者群について、音韻性と比較して意味性の障害が大きいということはなかった。【結論】思春期の統合失調症スペクトラム患者には言語学習、言語流暢性に障害が認められるが、この障害が日常生活上の障害の基盤となっているものと考えられる。

2. Somatization as a predictor of suicidal ideation in dissociative disorders

Erdinç Öztürk, Vedat Sar

解離性障害における自殺念慮を示唆する身体化症状について

【目的】本研究では慢性の複雑な解離性障害患者において自殺念慮を示唆する要因について調べることを目的とした。【方法】対象は DSM-IV により解離性同一性障害あるいは特定不能の解離性障害と診断された 40 名である。これらの患者について、Dissociative Disorders Interview Schedule, Dissociative Experiences Scale, Somatoform Dissociation and the Childhood Trauma Questionnaires, Spielberger Trait Anger Inventory, Beck Suicidal Ideation Scale, SCID の Borderline Personality Disorder section を用いて評価した。【結果】自殺念慮を有する群 (15 名) では、そうでない群と比較して身体化症状の合併が多かった。自殺念慮を有する群は、解離のトレイトもステイトも高い値を呈しており、解離症状の程度は強かった。さらに自殺念

慮を呈する群では、子供の時期の情動的虐待、身体的虐待、情動的ネグレクトのスコアが高かった。児童期のトラウマと境界性人格障害の有無で補正した後では、身体化障害の合併が自殺念慮を予測する因子であった。【結論】解離性障害患者において、身体化と自殺念慮との間に関連が認められた。トラウマに関係する不確定なアタッチメントパターンが両者に共通する基盤と考えられる。

3. Prevalence, correlates, and disease patterns of antipsychotic use in Taiwan

Chia Chien, Jer-Hwa Hsu, Shin-Huey Bih, Ching-Heng Lin, Yiing-Jenq Chou, Cheng-Hua Lee, Pesus Chou

台湾における抗精神病薬使用の解析

【目的】台湾の国民健康保険のデータベースを用いて、抗精神病薬の使用パタンの動向について解析することを目的とした。【方法】台湾の National Health Research Institutes から 20 万人のデータを入力し、ランダムサンプリングにより 2004 年度に 18 歳以上の 145,304 名のデータを解析した。この年に二種類以上の抗精神病薬を処方されている者について、その要因、精神科医の比率を調査した。【結果】年間の抗精神病薬の使用頻度は 3.5% であった。抗精神病薬の使用は、高年齢、女性、低い保険額、障害者、中央部あるいは南部での居住者に多かった。抗精神病薬の処方は、統合失調症、不安状態、うつ状態、神経症性うつ病、認知症、双極性障害に多かった。抗精神病薬を多く処方している医師は、消化器、呼吸器、筋神経と結合織の専門医、循環器系、神経感覚器系、生殖器系の医師であった。【結論】抗精神病薬は統合失調症、うつ病、不安障害、認知症、双極性障害に多く使用されていた。抗精神病薬使用の 60% 以上が、精神科医以外により処方されていたことは、患者の安全性を考慮すると今後の検討が必要である。

4. Comparisons of insight in schizophrenia, bipolar I disorder, and depressive disorders with and without comorbid alcohol use disorder
Cheng-Fang Yen, Cheng-Chung Chen, Chung-Ping Cheng, Chia-Nan Yen, Huang-Chi Lin, Chih-Hung Ko, Ju-Yu Yen, Cheng-Sheng Chen

アルコール乱用の有無と統合失調症、双極性 I 型障害、うつ病性障害の病識について

【目的】統合失調症、双極性 I 型障害、うつ病性障害をアルコール乱用の有無で分けた 6 群について病識の程度を検討することを目的とした。
【方法】上記疾患の外来患者 285 名について Schedule of Assessment of Insight-Expanded version (SAI-E) を用いて病識の程度を評価した。6 群について ANCOVA による検定を行った。
【結果】アルコール乱用の有無にかかわらず、うつ病性障害の患者群は統合失調症よりも高い病識を有していた。アルコール乱用はうつ病性障害と双極性障害の間に、双極性障害と統合失調症との間に、また、双極性障害と統合失調症との間に独立した影響を与えていた。しかしながら、同じ疾患群についてはアルコール乱用は病識に差異を与えてはいなかった。【結論】臨床症状、精神病性とともにアルコール乱用の合併は、病識の程度に影響を与えていることが明らかになった。

5. Individual versus group cognitive behavioral treatment for obsessive-compulsive disorder: Follow up

Nuria Jaurrieta, Susana Jiménez-Murcia, Pino Alonso, Roser Granero, Cinto Segalas, Javier Labad, José M. Menchón

強迫性障害に対する個人認知行動療法とグループ認知行動療法の比較研究

【目的】強迫性障害に対する個人認知行動療法とグループ認知行動療法の効果を 6 か月と 12 か月の時点において比較した。【方法】DSM-IV-

TR による強迫性障害と診断された患者 28 名について 20 セッションの個人認知行動療法とグループ認知行動療法を施行した。評価は開始時、6 か月後、12 か月後に Yale-Brown Obsessive-Compulsive Scale, Hamilton Anxiety Scale, Hamilton Depression Scale により行った。【結果】認知行動療法の効果は 6 か月後でも 12 か月後でも維持されていた。個人療法とグループ療法との間に差異を認めなかった。脱落率は女性に高かったが、個人療法とグループ療法との間に差異はなかった。【結論】強迫性障害に対して認知行動療法は有効である。個人療法とグループ療法との間にその有効性に差異は認められない。

6. Prior transient ischemic attack is independently associated with lesser in-hospital case fatality in acute stroke

Judit Zsuga, Rudolf Gesztelyi, Bela Juhasz, Adam Kemeny-Beke, Istvan Fekete, Laszlo Csiba, Daniel Bereczki

脳卒中患者における一過性脳虚血発作の既往は脳卒中入院患者の死亡率を低下させる

【目的】心臓虚血性疾患における一過性虚血の保護効果が知られているが、脳循環についての同様の効果はよく知られていない。本研究では、入院以前の脳虚血発作 (TIA を含む) が入院後の脳虚血による死亡率に影響を与えているかどうかを調べることを目的とした。【方法】入院患者の Debrecen Stroke Database に含まれている 2,874 名の急性脳卒中患者について調べた。そのうち 673 名には以前の脳卒中の既往が、195 名には TIA の既往があった。【結果】脳卒中患者の入院中の死亡率は、脳卒中の既往については差異を認めなかったが、TIA の既往は有意に低かった (オッズ比 0.53; 95% confidence interval: 0.29-0.98; $P=0.041$)。【結論】TIA は脳において虚血性プリコンディショニング効果を有している可能性がある。

7. Increased cell-free DNA concentrations in patients with obstructive sleep apnea

Chol Shin, Jin K. Kim, Je H. Kim, Ki H. Jung, Kyung J. Cho, Chang K. Lee, Seung G. Lee

閉塞性睡眠時無呼吸患者では cell-free DNA が増加している

【目的】 cell-free DNA はアポトーシスにより生じるとされており，cell-free DNA の血中濃度は心循環系疾患やがんなどの病的状態で増加することが知られている。閉塞性睡眠時無呼吸症 (OSA) 患者において cell-free DNA 濃度を調べることを目的とした。【方法】すべての患者に終夜脳波測定を行い，39～67歳の睡眠時無呼吸症患者164名について cell-free DNA 濃度を測定

した。【結果】PSG検査により無呼吸-低呼吸指標 (AHI) が5～30を軽～中等症 OSA とし (33名)，AHI が30以上を高度 OSA とした (49名)。残りの82名は AHI が5未満であった。蛍光 RT-PCR により b-globin 遺伝子と血漿中 DNA 濃度を測定した。高度 OSA 患者は，軽～中等症 OSA 患者あるいは OSA でない人と比較して高い血漿中 DNA 濃度を示していた。AHI は BMI ($P<0.001$)，高血圧 ($P<0.001$)，血漿中 DNA 濃度 ($P<0.05$) と相関していた。【結論】高血圧やほかの因子を補正した後でも，高い血漿 DNA 濃度を呈する人 (>8 mg/L) はそうでない人と比較して OSA のリスクが4倍高かった。

(文責：武田雅俊 PCN 編集委員長)